

住まい・生活編
半歩先の生活情報

ICTで変わる生活

「ソーシャルネイティブ」のライフスタイル

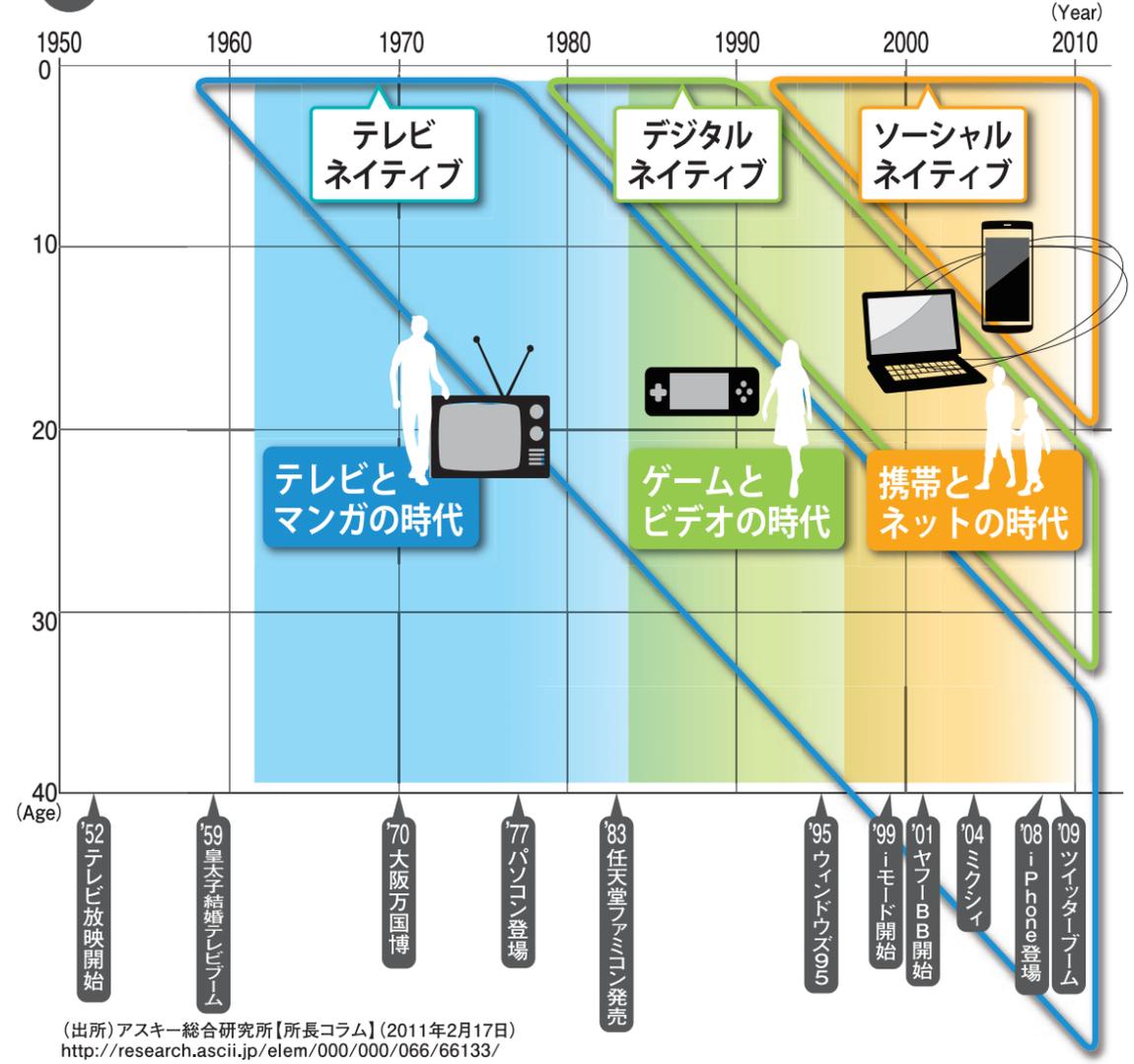
生まれたときからICT^(※1)やソーシャルメディア^(※2)に囲まれた環境で育ってきた現在の若者。この世代の人たちは、今「ソーシャルネイティブ」とも呼ばれています。そんな彼らの考え方やライフスタイルは、いったいどのようなものなのでしょうか。その生活を概観し、背景にある社会的意味などについて考えます。

(※1) 情報通信技術の総称 (Information and Communication Technology)
(※2) 個人の情報発信をもとにユーザー間のコミュニケーションを提供するウェブサービス。ネット掲示板やブログ、ツイッター、ソーシャルネットワークサービス(SNS)としてのフェイスブックやミクシィ、モバイル向けのグリーなどがある

ネイティブマップ

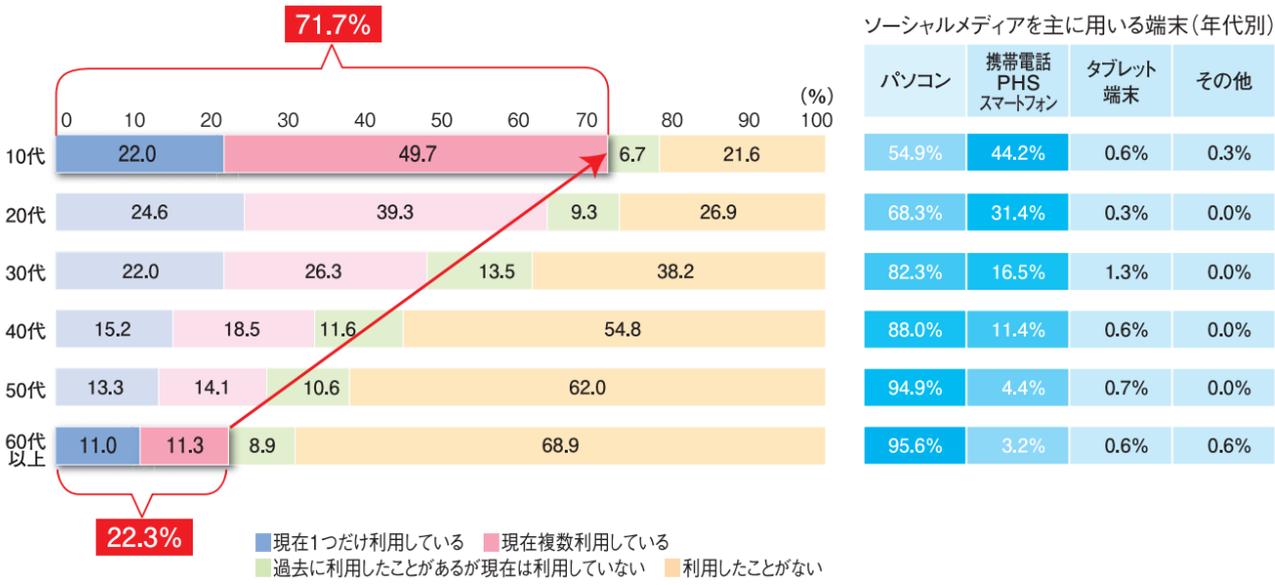
本来、ネイティブ(native)とは、その言語を母語にする人たちのことです。生まれたときからテレビがリビングにあった人たちはテレビネイティブ、パソコンやケータイ、インターネットのある環境で育った人たちはデジタルネイティブと呼ばれます。さらにその次の世代、今の10代から20代は

図1 ネイティブマップ



(出所)アスキー総合研究所【所長コラム】(2011年2月17日)
<http://research.ascii.jp/elem/000/000/066/66133/>

図2 ソーシャルメディアの現在の利用数、利用経験(年代別)
若年層ほど利用率および複数利用の割合が高く、パソコンよりもモバイル端末を利用



(出所)「情報通信白書23年版」(総務省) <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/index.html>

ソーシャルメディアに日常的に接し、それを使いこなしており、彼らをソーシャルネイティブと表現する人もいます(図1)。

逆に生まれたときにそのような環境がない場合には非ネイティブとなります。また、テレビネイティブはデジタルイミグランド(違う世界から来た移民)などともいわれることもあります。

東京大学の橋元良明教授他による『ネオ・デジタルネイティブの誕生』(ダイヤモンド社、2010)では、笠原健治氏(中一創業家)などのIT第3世代と呼ばれる人々をデジタルネイティブ「76世代」(1976年前後に生まれているため)、1986年以降に生まれた人々を「86世代」と表しています。

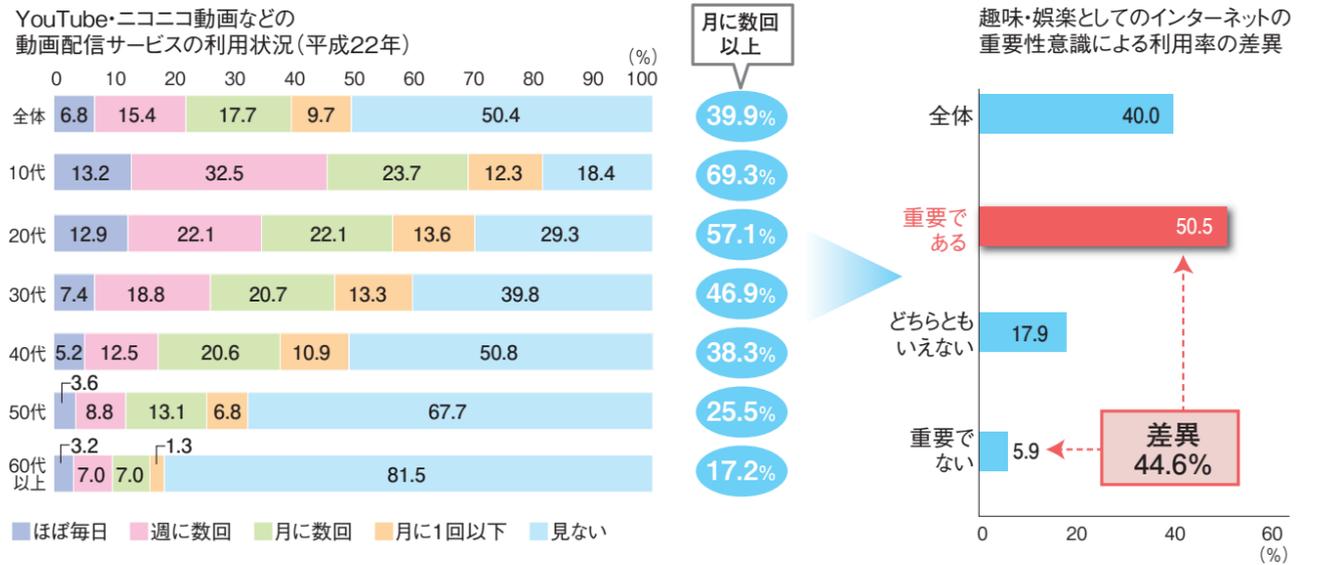
そして86世代はインターネットリテラシー(読み書き能力)が76世代とは異なることを指摘します。特徴としては書くため、あるいは身近な人とながめるための道具としてパソコンではなくケータイを多用していることなどが挙げられています。

ソーシャルネイティブのライフスタイル

86世代に近いソーシャルネイティブもケータイ、さらにはスマートフォンを使い、ソーシャルメディアを使いこなします。アスキー総合研究所の遠藤論氏は『ソーシャルネイティブの時代』(アスキー新書、2011)で、SNSやスマートフォンで友人関係を維持し、コンテンツもネットにある無料のエンターテインメントを楽しみ、ツイッターなどでレストラン情報入手、ケータイからカーシェアリングを予約する、といった彼らの生活を紹介しています(図2)。

そしてソーシャルネイティブのライフスタイルのひとつを「ピンボロハッピー」と名づけ、その中心的役割を果たす7つ道具として「無料コンテンツ」「ファストファッション」「リアルなバーチャル化」「シェア(共有)」「価格比較・共同購入」「ソーシャルメディア」「スマートフォン」があるといっています。それぞれ、コストなしに楽しめるエンターテインメントを、お金をかけなくともまともなファッションを、リアルより合理的に得られる仮想の高揚を、有せずに必要なものを、一番お得な購入方法で、身近で手軽な交友関係を、それらを実現する持ち運び可能な情報機器を、もたらしてくれます。要はネットリテラシーを体得し、ネットや世の

図3 動画配信サービスの利用状況(年代別)と、趣味・娯楽としての重要性意識による利用率の差異
若年層ほど利用率が高く、またインターネットを「重要」と認識している人ほど利用が進んでいる



(出所)「情報通信白書23年版」(総務省)
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/html/nc213520.html>

中のトレンドに敏感であれば、効率的に必要な情報を得ることができ、あまりお金をかけることなく幸せに暮らせる、ということ。そして、その背景にはものを所有することへの関心低下(欲しいからといって、所有する必要はない)、エコ意識やボランティア志向があるといえます。

デジタル化する社会の中でのリテラシー獲得

ピンポイントに限らず、最近の若者は車に興味がなくなった、デートもしない、お酒もあまり飲まない、などという現象が話題になります。では、ソーシャルネイティブにとって、そのようなライフスタイルは必然なのでしょうか。関西大学の岡田朋之教授(次頁、コメント参照)は、ICT云々よりも彼らが直面する社会環境の影響を重視します。少子化の中の狭い交友範囲、年功序列も崩れ発展が展望しにくい経済、若者の失敗に対して寛容でなく自己責任を追究する

社会。そのような補償や希望の乏しい中、萎縮してしまった彼らに車に関心を持ってといっても無理だろうと。

一方で「少子高齢化、グローバル化などのトレンドに加えて、社会全体がデジタル化することとは必然であり、それを前提として社会が組みかえられていくことは確かだ。ソーシャルネイティブであろうと非ネイティブであろうと、それに対応するための備えが必要である」と岡田教授は展望しています。つまり適切なデジタル、あるいはソーシャルリテラシーを身につけることが全ての人に求められていくわけです。

ただし、そのリテラシーの中には社会性や倫理も含まれていなければならない。そう考えると、外の世界から来たイミгранト(移民)としての非ネイティブの方が、はじめに学習するという機会を持つ(持たざるを得ない)という意味ではポジティブな面もあると岡田教授は見えています。

クラウド化とモバイルネイティブ

前出の橋元教授は、86世代よりもモバイル(携帯端末)志向がさらに尖鋭化し、日常的に動画に親しむ96世代を、ネオ・デジタルネイティブとして区別しています(図3)。現在、スマートフォンが急速に普及しています。これにタブレット型なども

異質なものとの交流が メディア・リテラシー獲得に 不可欠

現在の若者は、子どもの頃からずっと、同じような環境で育ってきた友人たちに囲まれている。そのため、かれらの多くはソーシャルメディアを、均質な仲間内の関係維持のために利用し、異質なものとの出会うリスクを冒そうとはしていないように見える。例えば、若者の間では、ツイッターでも鍵付きアカウントにして読者を限定し、内輪のツールとして使う例が少なくない。そういった点でICTは、自分が安住できる閉鎖的状況を容易につくりだすことのできる技術でもある。

しかし、本来、ソーシャルメディアの価値と可能性は、異質なものとつながるオープン性にある。中にはその可能性に気づいてベンチャーに向かったり、ネットワークを広げることに利用したりする若者もいる。東日本大震災以降は、ツイッターなどでも草の根的な情報をキャッチしようとする傾向が見える。

そこで重要になるのは、個人のメディア・リテラシーや倫理観だ。インターネットの世界では、制度や技術で(悪質なサイトの閲覧やネットいじめなど

岡田朋之 (おかだともゆき)
関西大学総合情報学部教授

の)リスクを制御することには限界がある。したがって、ユーザー自身がリテラシーを持つしかない。その際に必要なのは、デジタルメディアについての知識だけではなく、社会基盤に対する理解・教養である。その欠如が社会の中での軋轢(あつれき)を発生させている面がある。そのような社会性を養う効果的な方法は異質なものと接する機会を持つこと。ネイティブは自分たちの生まれ育った場の外部に触れなければ自分がネイティブであることに気がつかない。他者の立場に立って想像力を高める経験を持たなければ排他的な環境をつくる方向にむかいかねない。

いずれソーシャルネイティブがマジョリティになる。そのときデジタル環境になじめない人たちが追い詰められないような配慮が必要だ。非ネイティブ(マイノリティ)の存在を配慮させるのはマスメディアの重要な役割であろう。そのような形でマスメディアとソーシャルメディアが共存することが適切な社会づくりにつながるはずだ。

合わせ、モバイルの高機能化が進んでおり、いずれは手元にモバイルがあれば大抵のことができるようになるでしょう。それを支えるのが、クラウドコンピューティングです。従来のように自分のパソコンの中にデータやソフトがあるのでなく、それらはすべてネットの先の「クラウド(雲)」の中にあるので、必要に応じて利用すればよいわけです。

近い将来、本や新聞、映像といったコンテンツはもちろん、学校の教材類、仕事上の書類などの大部分がモバイルで利用できる状況で育っていく次の世代の人たちは、あるいは「モバイルネイティブ」と呼ばれることになるのかもしれませんが。

しかし、本当に新しいライフスタイルを構築するためには、技術を使いこなすだけでは不十分です。基底にあるその人の人間性や社会との関係性が基本であるということはいつ時代でも変わりません。私たちは新しいネイティブの出現に期待しつつも、彼らを教育する責任も負っているということを自覚しなければならぬでしょう。

(文責・CEL編集室)